

Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024

受賞作家略歴、コメント

サエボーグ | Saeborg

1981年富山県生まれ、東京都在住。半分人間で、半分玩具の不完全なサイボーグとして、人工的であることによって、性別や年齢などを超越できると捉えるラテックス製のボディースーツを自作し、パフォーマンスとインスタレーションを国内外で展開する。カラフルで、デフォルメされた雌豚や牝牛などの家畜や害虫などが繰り広げるパフォーマンスは一見明るく楽し気だが、人間の残酷性や消費の問題のみならず、人間社会における介護やケアの問題にも接続し、強者/弱者、支える側/支えられる側という二項対立ではおさまらない、多様性の受容、共生の問題に発展させている。

近年の主な展覧会や公演に、「ミドルズブラ・アート・ウィーク」(イギリス、2023)、「世界演劇祭2023」(フランクフルト、オッフェンバッハ、ドイツ)、「Ultra Unreal」(シドニー現代美術館、2022)、「Reborn-Art Festival 2021-22」(牡鹿半島(桃浦)、宮城、2021)、個展「LIVESTOCK」(PARCO MUSEUM TOKYO、東京、2021)など。

展覧会へよせて

今回の展覧会では、昨年の海外滞在リサーチでの経験や近作《Super Farm》を下敷きにした新作を発表します。ここで皆さんには家畜キャラクターに変身してもらい、ライフサイズの玩具のような牧場空間で、普段とは違う、動物的な体験をしてもらうことを構想しています。動物になった私たちの前に現れる謎の存在と私たちは仲良くすることができるのか？他者と自分、肉体と化学製品、生き物の種族やエコシステムのあいだを取り囲む壁を、超えることができるのか？皆で動物になって叫ぼう！

ブーブーモーモーメーメー、コケッココー！！



「Dark Mofa 2019『Pigpen』」公演風景
(Avalon Theatre、ホバート、オーストラリア)
撮影：Dark Mofa 2019



「Cycle of L」公演風景(高知県立美術館、2020)
撮影：釣井泰輔

津田道子 | TSUDA Michiko

1980年神奈川県生まれ、石川県在住。映像メディアの特性にもとづき、インスタレーションやパフォーマンスなど多様な形態で制作を行う。映像装置とシンプルな構造物を配置し、虚実入り混じる作品空間が、鑑賞者の視線や動作を操作し、知覚や身体感覚についての考察へと導く。また、2016年よりパフォーマンス・ユニット「乳歯」として、小津安二郎の映画作品における登場人物の動きを詳細に分析し、そこに内在する人との距離や、女性の役割に関する問題を可視化するパフォーマンスなどを展開する。

近年の主な展覧会や公演に、個展「津田道子 so far, not far」(金沢アートグミ、2023)、「とある美術館の夏休み」(千葉市美術館、2022)、「第10回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(クイーンズランド州立近代美術館、ブリスベン、オーストラリア、2021)、個展「トリローク」(TARONASU、東京、2020)、『『インター + プレイ』展 第1期』(十和田市現代美術館、青森、2020)、また、乳歯として「OPEN SITE 2019-2020」(TOKAS 本郷、2020)など。

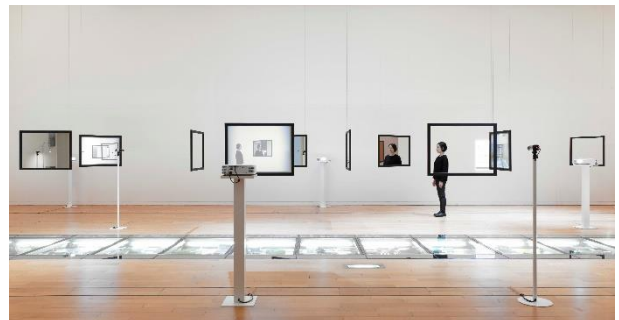
展覧会へよせて

コロナ禍に身体への関心が大きく変化したのは、私だけではないと思います。例えば家族のような最小単位の社会においても、他者との距離を意識することが身体の振る舞いに関わっていることを経験しました。カメラの位置やフレームと映る人の関係が、身体が持っている距離感を測る道具になると考えてます。

この展覧会は、ポスターが剥がれてるのを見つけた時に、そっと貼り直すような、しなくてもいいことだけど、気づいたことに働きかけた延長にあります。



《so far, not far》よりスチル画像 2023



《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》2016
「オープン・スペース 2016 メディア・コンシャス」展示風景
(NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、2016)
撮影：山本紉